

遠隔授業の実践報告—English Reading and Writing の授業の場合

佐々木 隆

プロローグ

2019 年末に発生した新型コロナウイルス感染症は 2020 年になると WHO が COVID-19 と命名した。2020 年度の前期・後期、2021 年度の前期・後期は COVID-19 の影響を受け、大学の判断や教員の判断により遠隔授業や対面授業が実施された。2022 年度も新しい変異株オミクロンの登場により、今後の授業形態についても確定できない状態だ。

ここでは語学の English Reading and Writing の内容の授業科目について 2020 年度、2021 年度についてその実践報告を行う。⁽¹⁾

1 遠隔授業する場合の環境の確認

遠隔授業を行う場合には配信を行う教員側の環境と授業を受ける、すなわち受信する学生側の環境がある。ここで言う環境とはインターネット環境のことだ。最近の PC やタブレット PC にはカメラ内蔵のものが多い。仮にこうしたものが内蔵されていなくても、外付けのウェブカメラを装着すれば何ら問題はない。スマートフォンにはすでにカメラ内蔵となっている。

(1) 教員側の配信環境

教員も自宅（大学以外）から配信する場合と大学から配信する場合の 2 つの配信環境がある。2020 年度については筆者も教員側として不慣れな点もあり、確実にできる方法を模索した結果、チャット形式で行った。自宅にもインターネット環境もあり、大学のシステム、C-Learning より協働板で行った。授業内容が Reading and Writing であ

ったことから、協働板で行うことも可能となった。2021年度は大学には当然学内ランが整備されているため、自宅よりもインターネット環境は安定して使用することができた。

[状況]

2020年前期 大学の判断により遠隔授業。自宅より配信。

2020年後期 大学の判断により遠隔授業。自宅より配信。

2021年前期 大学の判断により5月まで遠隔授業とし、自宅より配信。その後の授業形態は教員裁量となった。ただし、学生の事情に配慮し、大学は学生が遠隔授業、対面授業を選べるようにした。筆者は対面授業としたものの、遠隔授業と対面授業の学生が混在したため、大学よりハイブリッドで実施（遠隔授業での出席者が多数であった）。

2021年後期 大学の判断により授業形態は教員裁量となった。ただし、学生の事情に配慮し、大学は学生が遠隔授業、対面授業を選べるようにした。筆者は9月の第1回目は遠隔授業で自宅より配信したが、2回目以降については対面授業としたものの、遠隔授業と対面授業の学生が混在したため、大学よりハイブリッドで実施（当初は対面授業での出席者が多数であった）。なお、10月半ばよりは基本対面授業とすることが大学の方針であったが、学生の動向に統一性がないものの、11月半ばよりは遠隔授業出席者が大半を占めた。

ここで言うハイブリッド授業とは対面授業をしながら、その様子をインターネットより配信し、リアルタイムで対面授業と遠隔授業を同時に行うことを指す。遠隔授業の場合には学生が音声をONにすればリアルタイムで会話することもできる。

[教育方法]

2020 年前期 大学が採用している C-Learning 授業支援システムを利用。「出席管理」「教材倉庫」「レポート」「アンケート」「学習履歴」「小テスト」「協働板」「連絡・相談」機能などがある。おもに活用したのは「出席管理」「教材倉庫」「レポート」「アンケート」「協働板」「連絡・相談」である。

- ・「出席管理」は時間を設定して出席の確認できる機能。また、学生は自分の出席状況を確認することができる。アクセスした時間も確認することができる。

- ・「教材倉庫」は学生に配布する資料や教材を配信できる機能。時間設定もできる。

- ・「レポート」はレポート課題などを配信する共に学生がそこへ提出することもできる。また、教員の評価、コメントなどもここでできない、学生がアクセスすれば、その内容を閲覧することができる。時間設定することもできる。筆者はここで試験なども実施した。

- ・「アンケート」機能は選択肢方式、記述式など作成者が選べる方式のアンケート。筆者はこの機能を活用して、英語辞書や遠隔授業に関するアンケートを実施した。

- ・「協働板」はいわゆるチャット。

- ・「連絡・相談」はメール機能で、双方向でのやり取りが可能。教員側からは特定の学生や全学生に連絡ができる。

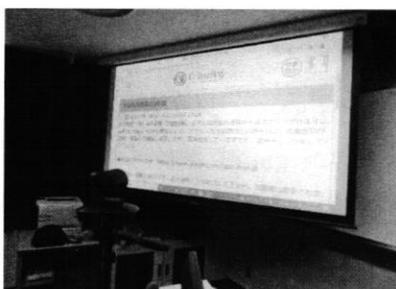
筆者はこれまで SKYPE は利用していたものの、それを利用しての学部の遠隔授業をすることはなかった。学生のネット環境や使用するツールなども十分な把握もできなかったことから、リアルタイムで「協働板」を利用したチャット形式で **Reading & Writing** の授業を行った。1 対 19~25 のチャットとなったのだが、特に筆者の戸惑いはなかった。毎週火曜日に「教材倉庫」や「協働板」で毎週金曜日に行う授業内容な

ど、ある程度授業当日にする活動の学生の順番なども予告し、事前に協働板で発表させることで、タイムラグによる時間のロスを減らす工夫なども行った。前期は学生に対面に1度も会うこともなく、遠隔授業の方法もすべて遠隔で説明することとなった。大きな混乱もなく、前期を終えることができた。

2020 年後期 大学が採用している C-Learning 授業支援システムを前期と同様に利用。

筆者も学生も協働板に慣れたこともあり、授業の途中でもチャットを通して質問なども頻繁に寄せられるようになった。チャットは履歴が残るため、学生は授業の振り返りをすることもできた。

2021 年前期 大学が採用している C-Learning 授業支援システムを2020 年と同様に利用しながら、遠隔授業で進めた。履修学生 2 クラスのうち、1 クラスは 2 年生のため、C-Learning を利用した授業をすでに経験していたことから、初回から本格的に授業に入ることができた。協働板によるチャット形式で授業を行った。1 クラスは 1 年生のため、昨年と同様にネット環境やツールの確認を行いながら進めた。大学の方針により感染者が多かった 5 月までは遠隔授業であったが、6 月よりは対面授業の開始となった。しかし、大学の方針により学生は対面と遠隔を選んで授業を受けることができることから、実際にはほとんどの学生が遠隔、対面での出席者が数名、場合により全員が遠隔となったこともあった。対面と遠隔のハイブリッド授業の授業となるため、協働板によるチャット方式だけの授業から ZOOM によりライブ配信しながら、協働板によるチャット形式なども利用した授業展開とした。



教場内の様子（2021年10月8日に撮影）

教室は CALL システムが導入されているが、このシステムは使用していない。CALL システム用のモニターが 2 台がある。実働用の大学の設備としてはコンピュータ 1 台、ウェブカメラ 1 台、投影用プロジェクター 1 台、投影用スクリーンが常備されている。筆者は遠隔授業と対面授業がスムーズにできるようにノート型 パソコンを 2 台持ち込んで PC3 台を利用して授業を展開した。

教室常備 PC ZOOM 配信用でプロジェクターの映像をそのまま配信するために使用。

持込 PC 1 協働板を常時受信

持込 PC 2 授業用のパワーポイント用

映像は PC 1 と PC 2 の内容をそれぞれ適宜切り替えができる。教室常備 PC でパワーポイントなどを共有すればプロジェクター投影しなくても配信はできるが、6 月以降は教室での対面授業との同時進行のため、スクリーンに投影することで、対面授業と同じような形式で進めた。

2021 年後期 感染状況が収まらなかったことから後期は 9 月第 1 回の授業のみ遠隔授業で全員協働板でのチャット形式で行ったものの、以降はハイブリッド授業で行った。前期と変わったところは、ZOOM 配信ではなく、大学が推奨している GOOGLE MEET によって行った。これは筆者がこれまで SKYPE と ZOOM しか利用したことがなかったが、後期より大学が gmail を付与していることから、GOOLGE MEET を利用した。これにより学生はよりアクセスしやすい状態となった。前期により筆者も学生もハイブリッドに慣れて来たこともあり、スムーズに進められた。単発での回答は音声による解答なども交え、チャット形式ではなく、よりライブ感を強めた。

授業展開はハイブリッドになると、教員側の負担がかなり大きくなった。実際に教室にいる学生への対応に加え、遠隔出席者のからの回答はタイムラグもあるため、これを説明などの時間を当て、できるだけ空白の時間を作らないように工夫した。

(2) 学生側の受信環境

2020 年度の遠隔授業では学生側のインターネット環境及び使用するツールについて確認がとれないままに大学側も遠隔授業をスタートさせた。2～4 年生はすでに大学のシステムにある程度慣れていることから、

大きな混乱はなく授業を開始することができたように思える。新入生についても第 1 回目の授業では全員がチャット形式に参加できたことから、学生自身も受信環境をある程度確保できたことがわかった。2021 年度前期についても同様の状態であったが、最初の時間に高校時代での遠隔授業の状況について学生から確認した。⁽²⁾ その結果では 33.8%がインターネット経由の遠隔授業が行われたとの回答であった。(インターネット経由の遠隔授業が行われなかった。56.2%)他の調査などでは遠隔授業での対応が 45%程度⁽³⁾であったことなども一部公表されたが、それほど高い数字ではない。文部科学省が 2021 年 5 月 25 日に発表した「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査(結果)」(調査期間:2021 年 3 月 5 日~7 日)によれば、2020 年度後期に大学において何らかの形で遠隔授業が実際されたのは 90.8%であった。ほとんどすべてが遠隔授業であったのは 59.6%であった。⁽⁴⁾

遠隔授業で学生に必要なものとは何であろうか。大別すると 2 つのことが挙げられよう。

- 1 インターネット環境
- 2 パソコン、タブレット等のツール

筆者が調査した結果では学生で自宅にインターネット環境がない学生はいなかった。また、遠隔授業で使用するツールについては全員がパソコンと回答した。単に動画を視聴するだけなら、スマートフォンでも対応できるだろうが、チャット方式の授業ともなれば、対応はかなり困難であろう。個人差はあるが、パソコンとスマートフォンの 2 台対応の学生もいた。

実際に授業を始めていくと、自宅以外での授業を受けている学生がいる事が分かってきた。Reading & Writing では必ずしも双方向の授業で音声による発表がなくても成立するため、チャット方式でも対応ができ

ることは大きな利点である。学生は必ずしも自宅で受講しているとは限らず、中には移動しながら、カフェなどで wi-fi 環境のあるところで受講している学生もいた。遠隔授業では場所が問題なのではなく、インターネット環境の有無が重要である。

2 遠隔授業で求められるもの

COVID-19 の影響により遠隔授業での対応を認める通知が文部科学省から発信されたが、その中で特に「双方向性の確保」が重要である。オンデマンド式の授業を行っても、それだけで終始してしまえば、一方通行となり、双方向性の授業とならない。オンデマンド式ではどのように双方向性を担保するかが重要となろう。双方向性を担保する意味で、チャット式は文字によるものだが、有効だ。ZOOM、GOOGLE MEET は映像と音声を伴った双方向性が確保できる。大学のアカウントであれば時間制限なく、利用できることも大きい。

映像と音声を伴った双方向性を担保するにはむしろ学生側の受信環境にある。音声が発せられる環境・状態であるか、映像は送れる状態なのか。実際の双方向性の授業では、学生はカメラ OFF、マイク OFF でスタートする。必要があればマイク ON となる。さらにチャットも同時に使用できるため、双方向性は他のものが音声で発言していても、チャットでメッセージを送ることが可能だ。

遠隔授業では特に教員からの指示等を受けての学生の活動、あるいは質問、学生同士の意見交換などをどのように双方向性をもって行うかが重要だ。

3 遠隔授業での思いがけない利点

FD (Faculty Development) として最近ではどの大学でも学生の授

業アンケートを実施している。マーク方式が主流であろうが、必ず、自由記述のようなものがある。学生からのアンケートをみると予想外のものがあった。

- (1) 気軽に質問ができる。
- (2) チャット形式の場合には記録が残るため、あとから振り返りができる。
- (3) 対面授業と遠隔授業が選べたことがよかった。

(1) については全く想定していなかった。これにはいくつかの要因があるが、協働板を活用した場合には、参加学生全員にメッセージを送ることも、特定の学生にメッセージを送ることもができるため、学生の質問内容により個別への返信と全員への返信を行えたことは学生への配慮として適切であったと考えている。また、授業にもよるが語学の授業であったため、チャットも教員1人対学生19~25人の対応となったが、筆者はもともと学生時代に英文タイプをマスターすることをひとつの目標にし、大学に行きながら専門学校にも通うダブルスクールをし、その後、世の中にワープロが登場、その後はパソコンが安価となり現在に至っている。いわゆるタッチタイピングについてはある程度のスピードでもってできる状態が以前からあったため、チャットによるやりとりが全く苦にならなかったことは大きな利点であった。そのことが学生には質問への応答が早く、また、全員のとのやりとりにも大きなタイムラグが生じずにできた理由にもなった。キーボードも使いやすいもので対応していくため、対応がスムーズに行えたことがよかった。

(2) については学生にはノートをとらずに履歴をコピーすれば、ある程度のものが後から作成できることになった。これを利点と捉えるか、むしろメモやノートととならなくなる悪しき習慣と考えるかは様々な意見があろう。大学での授業は「聞きながら書く」という2つの作業を同時

にこなすことが能力アップにつながると思えるからだ。聞くものもすべてを書くわけでもなく、どこかで取捨選択して書くのである。この判断こそがポイントを掴んでいるかどうかにつながる。

(3) については大学の方針であったため、それほど気にしていなかった。当然のコトとして認識していた。むしろ、自分自身のデジタル能力で、ハイブリッド授業の授業を維持していくことができるのかという大きな不安が当初はあった。しかし、2020 年度には本務校の大学の授業では中国にいる学生と SKYPE での授業、学会等における ZOOM 発表、会議等があり、ゲストだけではなく、自分自身がホストとして運営することも経験したことから、ハイブリッド授業の授業でのイメージがある程度できたことも幸いした。これにより 2021 年度のハイブリッド授業授業が大きな混乱なく継続的にできた。

4 教員のスキルアップ

2020 年度当初に遠隔授業を行うことが決まると、学生側のインターネット環境もあるが、教員側から「大学に十分な設備がない」、「わからないからできない」などの教員側の問題あっただろう。この問題はデジタルイミгранト⁽⁵⁾の教員には大きな問題だ。ペーパーレスになると合理化されたようにも思えるが、これまでは紙媒体の書類でのやりとりもペーパーレスになると、メールのチェックやシステム上の連絡などデジタル化された情報の処理に追われることになる。

授業では単調になをらない工夫も必要だ。そのための工夫も単にビデオなどを見せることで幾分かは解消されようが、学生にプレゼンテーション力を求めている昨今、教員自身がこれを率先してできなければ本末転倒ともなりかねない。

COVID-19 は教員のスキルアップをどう考えるかに実は大きな影響を与えたのではないだろうか。双方向の ZOOM や GOOGLE MEET の

の活用については学生のインターネット環境だけを問題にすることで自身でこれを活用することを考えない教員もいたかもしれない。

パソコンにカメラが内蔵されていなければ、外付けのウェブカメラを取り付けるもことも簡単にできる。また、共有機能を使用すれば、教員自身の映像はなく、パソコン上の画面だけなら配信はできる方法もある。

これまでの教職課程における教育課程ではその他の科目「情報機器の操作」(2単位)、さらに指導法では ICT 含む、教育方法・技術では ICT を含む内容となっているが、2022 年度よりは情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法も求められることになる。⁽⁶⁾ 今後教職課程を履修する学生には適用されることになる。文科省の対応等については拙著「教育方法としての遠隔授業」(2021)ですでに指摘しているため、ここでは詳細は省略する。⁽⁷⁾

しかし、すでに教員免許の保有者はもちろんのこと、現職で教壇に立っている教員にとって自ら新しい教育方法を模索することが強く求められることになる。大学で学ぶことは最低限のものであり、それですべてがカバーされているわけではない。そこから先は自身による向上が必要だ。

エピローグ

COVID-19 の影響により、好むと好まざるとにかかわらず、デジタル化の流れは着実に進んだのが 2020 年度以降の流れだ。教育界では、授業をどのように成立させるかという切実な問題から、遠隔授業が急速に進んだ。実は、設備の問題以上に教員側のスキルの問題があったのではないかと筆者は考えている。若い教員はスマートフォンを使いこなし、スマートフォンで Youtube で動画配信するなど、こうしたスキルを持っているものは少なくない。これに対してデジタルイミгранトの教員

は PC を使うこと精一杯で、さらに動画配信するなど考えてもいない場合が多かったのではないだろうか。ましてや自分自身でそれを設定し、それを使った授業をするなど、凡そ他人事ではなかつたらうか。現状ではそうでは済まされない事態となった。組織が大きくなれば、設定などは事務職員や IC 担当専門の職員がいる場合もあるかもしれないが、すべての教員の世話は到底できない。教員自身のブラッシュアップがなければ、遠隔授業は成立しないのが現状だろう。いわゆる文科系の教員であっても、これまでの情報機器の操作、ICT の活用に加えて、情報通信技術のある程度に身に付けることは必須だろう。

注

- (1) 筆者は武蔵野学院大学（埼玉県狭山市）と駒澤大学（東京都世田谷区）で授業を担当しているが、本稿では駒澤大学でのいわゆる語学の授業の報告を行う。駒澤大学は 2020 年度は大学の判断により前期・後期共に遠隔授業。2021 年度については前期は 6 月より対面授業と遠隔授業のハイブリッド授業授業、後期は第 1 回目のみ遠隔授業で他はすべて対面授業と遠隔授業のハイブリッド授業授業。2021 年度については大学に判断によりが学生の希望が優先となった。
- (2) 佐々木隆「教育方法としての遠隔授業」（『新教育課程研究』第 24 号、武蔵野教育研究会、2021 年 6 月）、pp.7-10.
- (3) 「オンライン授業、大学生等は 90%以上が受講した一方で小学生は約 15%に留まる【マカフィー調査】」（2020 年 10 月 9 日）、(<https://edtechzine.jp/article/detail/4546>)(2021 年 4 月 25 日アクセス)
- (4) 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」（2021 年 5 月 25 日）(https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou0100000_45)

20_1. pdf)(2021年1月13日アクセス)

(5) Marc Prensky “Digital Natives, Digital Immigrants.” *On the Horizon*. Vol.9 No.5, MCB University Press, 2001.

(<https://www.marcprensky.com/writing/prensky%20-%20digital%20natives,%20digital%20immigrants%20-%20part1.pdf#search='digital++natives%2C+digital+immigrants'>)(2021年4月29日アクセス)

(6) 文部科学省 『情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法 (仮称)』について」(文部科学省総合教育政策局教育人材政策課、2021年4月16日)

(7) 佐々木隆 「教育方法としての遠隔授業」、pp.19-22.

【キーワード】 遠隔授業、対面授業、ハイブリッド授業、情報通信技術、双方向

本論文と関係のある筆者のこれまでの発表

著書

『英語教育の行方』（イーコン、2011年5月）

- * 「教育方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）との関連、
「オンライン辞典」、「ICT教育の行方」

『大学教育の行方』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年8月）

- * 「インターネットと若者」

『ポップカルチャー論』（多生堂、2016年12月）

- * 「インターネットと若者」

『ポップカルチャーとオタク文化の微妙な関係』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2018年10月）

- * 「インターネットと若者」

『ポップカルチャーとオタク文化の微妙な関係 増補版』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2019年5月）

- * 「インターネットと若者」

『ポップカルチャーとオタク文化の微妙な関係 追加増補版』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2020年4月）

- * 「インターネットと若者」

論文等

「『デジタルネイティブ』とは何か」（『むらおさ』第20号、むらおさ
同人会、2014年7月）

「デジタルネイティブと教育」（『むらおさ』第21号、むらおさ同人会、
2015年1月）

「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」（『武蔵野教育研究』第3
巻第4号、武蔵野教育研究会、2017年2月）

「英語辞書に関する学生の意識について」（『新教育課程研究』第12号、

武蔵野教育研究会、2020年1月)

「英語辞書に関する学生の意識とデジタル化—COVID-19 を超えて」

(『新教育課程研究』第23号、武蔵野教育研究会、2021年5月)

「教育方法としての遠隔授業」(『新教育課程研究』第24号、武蔵野教育研究会、2021年6月)